

## 通訳における情報表示 日本語を起点言語として

楊 承淑  
(輔仁大学翻訳学研究所)

*This paper will use the territory theory of information to explore the intermediate representation of information in the note taking process of interpretation as well as in sign language by the use of corpus material. By looking at the linguistic facts and the representation of information that exist during the processing of information between the two languages, the characteristics of intermediate information representation in spoken Japanese, as well as the representation of information in the description of concepts and events will be explored. From the representation of information in Japanese and sign language, we can discover the process the interpreter goes through when storing and retrieving information and the particular characteristics of this process. Furthermore, by using the intermediate representation of information, we can come up with ordered structures of discourse, as well as being able to reconstruct the information contained in the Japanese source language.*

### 1. はじめに

通訳という言語行動の目的は、2つの言語間の情報伝達および情報交換にある。一方、通訳と普通の言語行動との違いは、談話を進める過程において、通訳者の情報処理により、異なった言語間の情報伝達や情報交換が行われることにある。このように、起点言語の情報がいったん中間処理を受け、そして目標言語に再生されていくという事実は、言語情報が伝達される過程において中間処理機能が介在していることを示している。

しかし、この情報の中間処理過程を示してくれるものは、これまで言語学ではいわば「ブラック・ボックス」(black box)として扱われていた。つまり、情報の処理過程や処理方法などが一切内在化され、容易に顕在化されないまま行われているのである。したがって、通訳という2つの言語間の情報伝達および情報交換を目的とする言語行動の分析においては、情報の中間処理過程を示す手がかりが必要となる。そこで本稿では、通訳者がとった逐次通訳のノートと手話通訳の文字化原稿を資料として用いることにする。

---

Yang, Cheng-shu., "The Representation of Information in Interpretation: Japanese as a Source Language."

*Interpretation Studies*, No. 5, December 2005, Pages 31-52

(c) 2005 by the Japan Association for Interpretation Studies

小論では、通訳における情報の「中間表示」(intermediate representation) に焦点を当て、手がかりとなる言語資料を通して、日本語を起点言語とする情報内容と情報構造がいかにかに分析・保存 (storage)・検索 (retrieve) されるかについて考察する。言語資料としては、逐次通訳の内容とノート、および日本語講義を手話通訳したものを逆通訳 (back translation) した文字化原稿を取り扱う。この2種類のデータは、いずれも起点言語の内容が目標言語に変換される過程や痕跡を残し、特に中間的な処理機能を表す中間表示が顕在化されているので、重要な証拠として用いることのできるものである。このような中間表示を通して、中間情報処理により残された情報内容と起点言語との比較対照を行い、また処理された情報内容により改めて再構築していくための枠組み作りを模索していく。このような考察によって、情報内容の取捨選択の基準や情報構造の枠組み作りなどを究明することが可能となろう。

## 2. 情報縄張り理論と情報伝達

逐次通訳の仕組みといえは、起点言語の情報内容と構造を、中間処理を経て正確に再現するということである。情報内容や構造の分解と再構築を究明することは、いわば逐次通訳のブラック・ボックスを開け、解読することになるとも言えよう。したがって、談話の情報内容を有効に伝達する方法や枠組み作りを知る必要がある。

まず、口頭による情報伝達の研究のなかで、陳述や民話のような話りの枠組みについての調査および分析結果を検討してみる。Schiffrin (1987:50-51) は談話の論理的枠組みとして、話者が自分の意見や主張を述べたり、もしくは自分の考えを説得しようとする場合は、“POSITION/ SUPPORT/ POSITION/ SUPPORT/ POSITION” という談話構造をもって表していると指摘している。POSITION とは話者の主張や立場を指し、SUPPORT は話者の主張をサポートするための論拠である。POSITION と SUPPORT の間には談話標識 (discourse marker) として、so, and, but, because などの接続詞が使われる。Schiffrin の談話分析を見て分かるように、情報伝達の際にはパターン化された手順と方法に基づき、縄張りが形成されながら情報発信が行われている。小稿では、通訳ノートや手話の情報内容を照応させることによって、パターン化された談話構造のフレームワークや接続詞の役割を果たす談話標識がいつそう明らかにされるであろう。

次に、Grimes (1975:293) は世界の民話を大規模に調査した結果、民話の述べ方として「重ね構造」(overlay) という話の組み合わせが用いられることを指摘している。すなわち、旧情報・新情報・強調表示 (highlighting) の順番で話を取り立てるのである。例えば、“BDG / DFG / CDFGH / AEH” のように、情報が繰り返されるうちに、話の筋が次第に展開されていくのである。このような重複した情報内容が、通訳の中間表示において一定の順番や構成でなされているということであれば、情報伝達の痕跡や変容をより具体的に把握することができるはずである。

上記のように、談話 (discourse) は、一定の手順と構成パターンを踏まえて情報内容を

伝えていく。それはルール化され、話し手と聞き手との間に内在化された暗黙の了解となり、情報の送信と発信が円滑に進められる基盤となる。

こうした情報伝達の過程を理論化した形で説明する「情報縄張り理論」(the territory theory of information) について触れてみよう。この理論は語用論の見地に立って、これまでには神尾 (1990, 1997, 2002) や神尾・高見 (1998) などによって提唱され、次第に形成されつつあるものである。さまざまな捉え方があるなかで、通訳の情報伝達においては、情報が伝えられるプロセスの分解や媒介をするキーワードの捉え方などの点で、この理論は情報構造の分解と構築に役立つ手法であると認められる。これによって、起点言語における情報構造をきめこまかく解析することが可能となり、情報伝達を行う流れをも明らかにすることができる<sup>2)</sup>。

そのほかに、記号などの情報を伝達するために、最も特徴のある成分 (elements) を使い、それを記号全体の意味を表すようにすることも、この情報縄張り理論の応用となる。例えば、“NY” がニューヨーク、“HK” が香港を表す記号として使われた場合は、情報の最も特徴的な成分が表現されたことで、情報の縄張り規則により、記号のもつ意味を最大限に投射させ、元来の意味が解明されるわけである。これは通訳ノートにおける記号論の形成には極めて意義のある理論である。

本稿では、情報縄張り理論の2つの側面をとり入れ、通訳の言語資料を通して情報伝達する過程とその操作方法を考察する。特に、情報の記号化 (encoding) と復号化 (decoding) の規則、および記号による情報構築の原則と特徴を記述したい。

### 3. 通訳ノートおよび手話における情報の中間表示

なぜ、通訳ノートと手話通訳を情報の中間表示として取り扱うかという、それが逐次通訳と同時通訳の過程を表す最適な媒体だからである。通訳ノートは基本的には逐次通訳にしか使わないもので、通訳の情報処理過程をよく示すノートであれば、研究する価値が大きいと言える。本稿では筆者がとった日中ノートと永田 (2000:44-47) による中日ノートおよび通訳内容を使うことにする。一方、手話通訳の場合は、逐次通訳に見られる起点言語と目標言語の情報伝達における時間的落差がなく、起点言語とほぼ同時に進められるので、いわゆる「形で示されるリアルタイムの情報伝達の痕跡」としてみなされる上、情報量から見ても極めて濃縮した形の中間処理であるという点に注目できるため採用したわけである。今回は好都合にも、手話の逆通訳を文字化したもの (若松 1989 ; 本稿付録1を参照) を入手できたので、逐次通訳との対照も踏まえ、起点言語と手話通訳との対照分析を丁寧に進めることができる。

逐次通訳のノートと同時通訳を示す手話という言語資料を用いて、共通点として調べられるのは情報の記号化と復号化をめぐる規則である。通訳の筆記も手話も、当然語るスピードに追いつけるわけではなく、そのため厳しい時間制限を受ける。そこで、情報内容の取捨選択と原情報を再生するための効率性が問われることになる。したがって、この研究

を通して、何が情報伝達するために最小限に押さえられなければならないものであるかについて、知見を得ることができる。そして、原情報に復号する効率性のよい情報構造を探ることも可能となろう。具体的に言語資料を扱うにあたって、通訳の筆記に書かれているものと手話によって表された意味内容とが、記号の情報内容として考察する対象となる。

ここでは、考察する方向は記号のもつ意味の単位、省略する度合い、および論理の枠組みに絞りたい。大量に情報を削除しなければならない状況のなかで、有効に起点言語の情報内容を伝達するには、情報の単位、情報の取捨選択、そしていかに最大限に原情報を再生するかということは、情報伝達の基本である。

まず、情報の単位について考える。すべての情報中間処理には共通のメカニズムが存在するが、それは単位を分割するか、まとめるかという形の変化が生じる点である。しかし、情報の保存や検索に関わる場合は、情報を有効に保存するために、Miller (1956:81-97) の実験結果のように、情報をまとめてチャンキング (chunking) すれば  $7 \pm 2$  まではメモリースパン(memory span) に押さえられることが知られている。また、リーディングの研究でも、チャンキングすることによって情報が確実に理解・吸収されるという概念がいくつも提起されている (Weaver & Garrison 1977: 113-115; 門田・野呂 2001: 99)。

手話通訳の場合の情報単位については、若松 (1990b:102) によれば、字数で計算した場合は **2-6 字**<sup>3)</sup> となる。情報が持続的に保存できる平均秒数は約 **1.5 秒**で、大体 2 語に当たる。逐次通訳の場合は通訳者によって筆記の付け方にはかなりの個人差があるために、起点言語との対応関係で単位を字数や秒数で表すのはなかなか難しい。また、目標言語ではなく、中間表示という位置で対応関係を比較対照すると、手話のもつ同時性との落差を区別しなくてはならない。そこで、逐次通訳の情報単位は手話通訳のデータを参考にした上で、考察することにしたい。

以下は筆者が行った逐次通訳の実例による調査であるが、起点言語 (日本語) の内容は 20 分 45 秒の即席講演で、約 300 文の長さである。ノートではおもに講演時に区切った箇所を基準に分断しているが、長い区切りはさらに分割する場合もある。情報単位とは起点言語の字数をノートの記号と字数の総数で割ったものである。字数の算出基準は漢字・仮名混じりの字数 (句読点込み) に基づくが、ノートの場合は漢字・仮名・略語<sup>4)</sup>・記号 (符号・図案・線など) を字数や個数で計算する。

起点言語の内容と通訳ノートの表示との対照を例にして、両者の対応関係と省略する度合いを検討する。紙幅の制限のため、資料の一部のみ取り上げることにする (左右の欄には、字数や記号の個数が記されている)。

この通訳ノートと起点言語との字数や記号数の対応関係を見ても分かるように、情報を選出する際、2 割弱という割合で中間表示が表される。しかも、ほとんど文単位で情報が取捨選択されるように対応している。いわば、起点言語の順序や構成なども保存されているわけである。しかし、もちろん一部の情報はノートではなく別な形で保存される場合もあるであろう。例えば、談話のコンテキストに依存する情報 (例 8 の「セキュリティーを

売る」) や、談話の参加者として当然知っている事実などはノートに記入する必要はない。したがって、ノートに残ったわずか 2 割の情報は<意味>を単位にするもので、かなり厳選された結果である。結局、中間表示が 5 倍ほどの縄張り効果を発揮したと言える。

10	起点言語(SL) ; 83 字	通訳ノート(note-taking ; NT)
14	日本でも、それから台湾でも、	JP/TW: 4
69	こういったセキュリティーの仕事を、成立をさせ、そして成長させて来るといのは、大変な努力が必要であるということは、皆様ご存知のとおりです。	scrty 成立 ↗ ↗ 努力 要! 9
中 訳	無論在日本或者在台湾, 我們要成立一個保全事業。要讓一個保全事業能夠得以成長, 各位都一定知道, 我們付出相當的努力。	
11	起点言語(SL) ; 28 字	通訳ノート(note-taking ; NT)
5	創業当初、	起業 2
23	私は毎日足を棒のようにして、売りに歩きました。	ex. 棒(○) <sup>5)</sup> 4
訳	我在開創保全事業的時候, 我是非常辛苦的一步一腳印地走過來。	

このような起点言語の字数とノートの記号数との対応関係では、永田のノートにおいて、合計 185 の個数で 591 字の中国語情報が記述されているのである。全体で約 3.2 倍の縄張り効果で、つまり 31.3%の割合で情報を集約している。

これは起点言語の中国語は情報集約性の高い漢字を使用するために、日本語より濃縮や削除できる情報の量がそれだけ少なくなるからである。しかし、個別に各段落を見ると、ごく短い区切りを除けば、多くは 4-5 倍の縄張り効果が得られていることが分かる。例えば、冒頭の 3 つの段落には、ノートの記号数と起点言語の字数とがそれぞれ 19:83 (4.37)、13:25 (1.92)、14:61 (4.36) という割合で記されている。以下は永田 (2000:44-47) 「唐外相記者会見」より抜粋し、通訳ノートと対応する内容であれば網掛けで示すようにする。

1-	起点言語(SL) ; 83 字	通訳ノート(note-taking ; NT)
1-1 1-2	中日關係在邦交正常化以後, 迎來了一個熱潮。 但是過了一段, 乾杯、友好的時代很快就過去了。	C-J 迎~ (交/ 友好 time
1-3 1-4	那麼進入了一個務實的時代、務實的時代。 現在我認為已經進入一個全面的成熟的時代。	----- > 務實 成熟 -----
和訳	中日關係は国交正常化後、友好ブームを迎えた。(1) しかし、一時期の、乾杯、友好万歳という時代はすぐに終わった。(2) そして、実務の、実務的な時代に入った。(3) 現在、私はすでに全面的に成熟した関係の時代に入ったと思う。(4)	

2-	起点言語(SL) ; 25 字	通訳ノート(note-taking ; NT)	
2-5	我想我們看問題要看主流。	↑ 看 ↓ 主流 ~\ 何? 形成? -----	13
2-6	究竟什麼是主流?		
2-7	形成主流?		
和訳	私は、我々はこの問題を考えるのに主流になっているものを見るべきだと思う。(5) いったい、何が主流なのか。(6) 主流を形成しているのか。(7)		
3-	起点言語(SL) ; 61 字	通訳ノート(note-taking ; NT)	
3-8	我認為在中國、在日本包括剛才您講的庶民階層在內，也可能在有些問題上存在不同的看法，甚至存在很不同的看法。	C,J.( ) ~> 民 8 不同, !!	14
3-9	有比較特殊的分歧。		
和訳	私は、中国で、日本で、さきほどあなたの言った庶民階級を含めて、おそらくいくつかの事柄に関しては、異なる見方、時には非常に異なる見方があるかもしれない、と思っている。(8) 比較的、特殊な意見の食い違いがある。(9)		

一方、情報処理とは、保存だけではなく、理解・分析・取捨なども行われるものである。単純に起点言語との対応関係で見る限りでは、手話通訳の場合、若松 (1989a:19) によれば、講義と逆通訳の一致はわずか 40% 程度である。しかし、さらに講義の余剰や反復表現などを削除した場合は、一致率が 60% 程度となる。また、講義から情報の基本的筋道となるタームを抽出して、手話の内容と付き合わせると、その一致率が 80% となる。つまり、手話のサインの情報伝達機能の有効性は 2 倍ほどの効率をもつと言えよう。

若松のこの実験はかなり専門性の高い通訳者によるものなので、この点を重要なファクターとして考えなければならないと思う。もう一つ重要な要因としては、手話の場合は同時性をもつために、場面に依存できる情報は省ける。また、顔や体などを通して、ボディランゲージとして通訳者によって表される成分もかなりある。それらは、手話のサインには出てこない情報であるが、情報伝達に伴い、同時進行しているものである。

そこで、問題は何が省略されてよい情報であるかという点である。若松 (1989a:23-24) の講義と逆通訳の対応実験データから、一致度を品詞別に集計すると、助詞・助動詞の一致率が低く、名詞・動詞の一致率が相対的に高いことが分かる。語彙間の関係を表す助詞と動詞のテンスやアスペクトなどのように事象 (event) を表す助動詞などが省略された理由は、情報縄張り理論によると、主役の名詞や動詞さえ出てきていれば、その意味内容を最大限に投射することによって、助詞や助動詞の機能が現れ、もともと意味のない格助詞と係り助詞、もしくは意味の軽い副助詞・終助詞・間投助詞や助動詞が省略されても聞き手には理解できるとされる。この点は、この実験において、結局、逆通訳での助詞の正答率が 75% となっていることから裏付けられる。

逐次通訳のノートにも上記の助詞や助動詞の記述は一切ないが、代わりに“:”を使って前出情報に関する説明を述べたり、“→”を用いて事象の結果を表したり、“ex.”をもって「例えば」を示したり、また“!”によって終助詞の機能が表されたりするのである。これらの記述は、いわゆる「機能語」(functional word) をなす語彙が**符号化**される現象とも言えよう。一方、「成立」「努力」「(必要)」「起業」「棒」「耳」などのような(形容)名詞や動詞などの「内容語」(content word) は保存されやすく、しかも起点言語の語順に沿って記されていることが見られる。なかには、特定の談話に限って多用される「台湾」「日本」「中国」「セキュリティー」などのような固有名詞は“TW”, “J (P)”, “C”, “scrty”などと**略語化**されているのである。

上記のことを一般化してみると、特定の命題や個別的な情報内容は省略不可とみなされる成分であるのに対して、一方、談話の構造や論理に関わる談話の普遍的な通念となる成分は省略可能と言えよう。つまり、話し手によって特定された情報内容 (specific information) は、文脈や常識などで推定できないものであるために、文字そのものや音の模写や表記の省略などの手法を通して記述される必要がある。それに対して、我々の談話経験によって、すでに共通認識を有する一般的な通念 (general convention) をもって類推可能な情報成分であれば、記述されなくてもよい。さらに助詞や助動詞のほか、テンス、ムード、モダリティー、アスペクトなどのような成分もこのカテゴリーに入るとされる。

一方、情報の不一致については、「実体を表現する語彙は伝わるが、関係や論理を表現する情報は伝わらない」とする手話に関する観察報告がある(若松 1989a:23)。つまり、関係や論理を表現する情報が相対的に伝わりにくいというわけである。これは手話の伝達する内容において日常生活の表現が多い一方で、関係や論理を表現するための標準的な表現形式が欠けているためだとされる。また、伝達されなかった語彙は1割ほどあるが(若松 1989a:22-23)、それは、おもに用語や動作の欠落、もしくは誤りによる情報の不一致のためである。

逐次通訳の情報処理においても、手話と同じように、情報の漏れや判断の誤りなどの制限を受けている。特に、情報密度の高い複合語・専門性の高い学術用語・用語の羅列・外来語などが挙げられる<sup>9)</sup>。いわば、時間と争うなかで、分量の多さと内容の難解さが保存と理解を妨げる。この最初の関門をクリアしなければ、次の分析と取舍選択が当然できなくなる。

上記の情報の不一致から見て、大体2通りの難しさがある。まずは抽象的な内容に関する問題である。これはさらに2つのカテゴリーに分けられる。一つはあいまいな意味、あるいは用語の意味内容をどう理解するかということである。これは、文脈において真意を探っていくか、百科知識をもって当たるか、もしくは特定のテーマに対する予備知識を備える等の方法で対応する。つまり、想像力と知識のデータベースを通じて、認知するアンテナを張って理解力を強めることである。もう一つは、物事の関係や論理の表現をどう表現するかということであるが、これは前述のように、符号化することによって中間表示することが可能である。物事の関係については、肯定・否定・対照などが中心となるが、論

理の表現では、Schiffrin の談話分析で指摘されたように、接続詞が中心となる。

次に問題になるのは、情報の密度が原因で、いわば口語と筆記、もしくは手話との速度差により、情報漏れや判断の誤りをもたらす点である。この困難をクリアするためには、記号や略語の有効性を高めなければならない。前述したように、記号は抽象的な関係や論理を示すためのものであるが、語彙の短縮を図った略語は固有名詞を表現するものが多い。そこで、通訳ノートには「台湾」「日本」「中国」など通常の国名のイニシャルのほか、さらに「警備」を“KB”、「セコム」が“SCM”、「想像」が“SOS“O”（註：S“O=ZO）で表されるように、子音のみや音の模写や頭文字による表記のごとく、音声表現の特徴を収斂させるという略語化のルールに基づいて記される。このような中間表示の特徴は、情報縄張り理論によって十分説明できるのである。

通訳ノートや手話のサインを対象に、原情報の中間表示について検討すると、言語の中間処理がある程度具現化されれば、情報選出する割合が媒介によって異なるものの、その過程ではいずれも大幅な削減と厳しい取捨選択が窺える。その結果として選び出されるものが、名詞や動詞を中心とする語彙である。それがさらに意味内容に基づいて圧縮され、音声特徴を示す原則によって略語化される。また一方では、情報間の関係や論理を示すために、中間表示とする符号化が見られる。それらにおいては、ほとんどの場合、文単位で情報の取捨選択が行われ、起点言語の順序や構成などの対応関係が示される。すなわち、効果的な中間表示においては、原情報の語彙内容や論理関係、および文の順序や構成などに対して全面的なアクセスが行われるのである。この中継的な中間記述をベースに、起点言語の情報内容と構成がよく整理され、簡略化されることによって、情報の保存と再生が容易になり、情報の伝達が円滑に進められるようになる。

#### 4. 情報表示における情報構造と情報内容

前節では、情報の中間表示を中心に、その内容と特徴について検討してきたのであるが、本節では、情報表示するにあたって内容と構造をどのように仕立てるかについて、さらに詳細に考察を行う。しかし、通訳ノートと通訳内容の関連性を有効に論ずるためには、他人のものを推測するよりも、筆者自身が筆記したものを使い、自らそのプロセスを説明することにする。

ここで取り上げた言語資料は日中逐次通訳の即席講演の冒頭に当たる部分であり、原稿も要約もない状況におかれているため、耳に頼ってノートを取り、通訳したものである。講演者はセコムの創立者である飯田亮会長であり、聴衆はセコムが出資した台湾セコムとも言うべき「中興保全公司」の中堅幹部である。期日は2002年6月11日である。以下において、テキスト1から11に分段するが、さらに通訳者によって分段された場合、横切りの棒線で示す。起点言語と目標言語においては、通訳ノートと対応する内容であれば網掛けで示すようにする。



1	起点言語 (source language ; SL) : 73 字	通訳ノート:5 (note-taking ; NT)	目標言語 (target language ; TL)
	11年ぶりに、台湾に参りました。大変長く来なかったわけですが、こんなに素晴らしいところだったら、もっと頻繁に来るんだしたら、と惜しい気がします。	11年 TW ☺ (6%)	我已经有 11 年没有来到台湾了。我要是知道来到台湾这个地方，会是这么好的，那今天的场地会是这么的理想的话，我应该更早就过来台湾。
2	起点言語(SL) : 50 字	ノート(NT) : 6	目標言語(TL)
	私が前董事長の林灯先生と、台湾で、セキュリティの事業を始めたのは、今から 33 年か 4 年前だと思います。	30-3 か 4 年 (12%)	我跟前董事長林燈先生，共同在台灣創設保全事業，是距今 33 年到 34 年左右的時侯。
3	起点言語(SL) : 138 字	ノート(NT) : 13	目標言語(TL)
	その 30 年、約 30 年の間にですね。このようにいい警備会社が台湾の中にできたと、それはもちろん、その前董事長、現董事長、それから経営をいただいている皆さんのおかげだと思いますけれども、何より、ここへ集まっている幹部の方々のご努力だということで、深く感謝の意を表したいと思います。	約 30 年 (○) ㊦ よい KB 林 みな かんぶ (9%)	這將近 30 年的歲月，在台灣能夠成立起保全事業，當然除了前董事長林燈先生（漏れ訳：「、現任董事長」）的努力和經營之外，我相信最需要感謝的就是在座的幹部的辛勞。

まず各段落における情報伝達の有効性について検討する。上記のテキスト 3 のノートにおいて記されているが、訳語において反映されていない情報として「よい」という語がある。これに伴い、訳では「前董事長」の名前を補足していながら、「現董事長」が漏れ訳となっている点を見ると、恐らくここで多量の情報を処理しつつあるなかで、通訳者に何らかの迷いがあつたため、誤った認知が生じてしまったのであらうと思われる。

4	起点言語(SL) : 67 字	ノート(NT) : 9	目標言語(TL)
	私どものセコムという会社は 40 年前に、えー、約 40 年になるんですが、今年で 40、今年で 40 年になるんですが、40 年前に会社を設立をいたしました。	SCM 40 やく (○) 今年で 40 年 (13%)	SECOM 這家公司，是大約 40 年前成立的。今年將步入第 40 年。

5	起点言語(SL) : 48 字	ノート(NT) : 5	目標言語(TL)
	40 年前に会社を作ったということになりますと、 大体皆さんはですね、私の年は想像できると思うんです。	S O S " O  (10%)	我一說 40 年前創業， 那麼各位也就可以推算我的年齡了。
6	起点言語(SL) : 57 字	ノート(NT) : 8	目標言語(TL)
	えー、40 年前、30 何年前、 台湾で、何も警備会社がなかったように、40 年前、日本でも警備会社というのはありませんでした。	{30 年 TW} {40 年 JP}  (14%)	就像三十幾年前，台灣沒有所謂的保全事業。而四十年前，日本也是一樣沒有保全事業。
7	起点言語(SL) : 106 字	ノート(NT) : 15	目標言語(TL)
	なんにもないところに、新しいものを作る、警備会社を作る。これは社会がセキュリティーというものを 買う習慣がない、いうところで作っていくわけですから、まあ、まあまあ大変な作業がそこには待っているわけです。	ない NEW KB  社会 買う × たいへん  (14%)	在一個完全沒有保全事業的不毛之地，我們想要創設保全事業。  在一個社會還沒有我們必須付錢來獲取保全的服務，這樣的觀念之下， 這是一個非常艱辛的產業。

テキスト6のノートには、年数の「30年」と「40年」、そして地名の「台湾」と「日本」が相対的な位置におかれている。この構成を見て分かるように、訳語の言語表現でも、中間表示の情報が如実に反映されていることが窺える。つまり、情報内容と情報構造を工夫して仕立てることができれば、それを有効でかつ効率の高い情報伝達へと繋げることができる。記号の位置や記号間の構成関係について見ると、永田ノートの5~7と同様に3回も現れた「主流」に続く文が3行に分けて記されており、しかも「主流」を記すべき位置に空欄が認められる。このことから、効率の高い情報伝達が成り立っていることが知られる。テキスト7のノートにあるように、区切り線が書き込まれた結果、目標言語の2つの段落の冒頭では、同様に「在一個…」で始まる表現が現れている。これは、通訳者が中間処理する段階の認知を忠実に反映したものと考えられる。

8	起点言語(SL) : 167 字	ノート(NT) : 17	目標言語(TL)
8-1	私も、今ここにネクタイをこうしてしています。皆さんもネクタイをしています。男性の方は、これは買う習慣があるから、ネクタイをしているだけの話なんです。	〔(絵=ネクタイ)  (買う) <sup>8)</sup> しゅうかん つけ	我想今天我們大家都打著領帶，各位也打了領帶，我也打著領帶。 為什麼我們能夠打著領帶在這裏說話？那是因為大家願意買，那麼你才會打領帶。
8-2	実を言うと、このネクタイというのは、ほかに何に使えます？鼻もかめないし、何も使うことは、ハンカチにもできないですね。 ところが、買う習慣があると、買ってただつけている、ということなんです。	用途：鼻  ハンカチ  (9%)	這個領帶，我想起來，其實沒有什麼用。我又不能拿來擤鼻子，好像什麼作用都沒有。 但是當大家覺得有價值的時候，你才願意掏錢去買。那麼我們大家也才帶著領帶，在這邊使用了這個產品。

上記のテキスト 8~2 のノートには、「ハンカチ」と記載されているにもかかわらず訳語には出ていない。この段落には約 1 割の情報しかノートに記入されなかったため、目標言語の内容も漏れ訳とともに、過剰な補足 (TL: *イタリック体*) も出てきている。こうした情報伝達のゆれが生じているのは、中間処理する段階で情報の記載が不十分であるためか、または不明瞭であったためであるように思われる。

また、テキスト 8、9、11 の部分では、ノートの記載がこれまでの段落よりもさらに簡略化しているように思われる。とりわけ段落の最後の部分においてそうした傾向が目立つ。これについては 2 つの可能性があると考えられる。一つは、通訳の区切りの単位が大きくなると、情報処理する負担もそれに応じて大きくなるため、段落の最後の部分が記憶に頼って処理されるためである。もう一つは、通訳者が話の流れに馴染んできた結果、ある程度の関連知識や学習効果が生じ、それに頼って情報の理解や分析に当たることができるようになったためである。これは記号の情報縄張り効果として説明できるし、永田ノートにおいても 3、4、5、6、7、8、9 のように、同様の取り扱い方を採用していることが認められる (永田ノートは付録 2-1 から 2.3 を参照、筆者ノートは付録 3 を参照)。

9	起点言語(SL) : 96 字	ノート(NT) : 8	目標言語(TL)
	我々は日本と、それから台湾で、社会の人に、ネクタイよりももっと価値があるセキュリティーというものを、買う習慣をつけました。そのことについては、我々は大きな誇りを持っていいと思います。	JP/TW: ( <i>) ↳beter scrtty  (8%)</i>	在日本，或者在臺灣，我們的社會當中，有比領帶更有價值的，就是這個保全。我們在這裏辛勤的工作，讓大家能夠建立起一種付費得到保全的習慣，這一點是我們的驕傲。

10	起点言語(SL) : 83 字	ノート(NT) : 13	目標言語(TL)
	日本でも、それから台湾でも、 こういったセキュリティの仕事 を、 <b>成立</b> をさせ、そして成長させ て来るといのは、大変な <b>努力</b> が 必要であるということは、皆様ご 存知のとおりです。	<b>JP/TW:</b> <b>scrty 成立</b> ↗ ↗ <b>努力 要!</b>  (15%)	無論在 日本或者在 <b>台灣</b> ， 我們要 <b>成立</b> 一個保全事業。要 讓一個保全事業能夠得以成 長，各位都一定知道，我們付 出 <b>相當的努力</b> 。
11	起点言語(SL) : 228 字	ノート(NT):23	目標言語(TL)
<b>11-1</b>	創業当初、 私は毎日足を棒のようにして、売 りに歩きました。 しかし、 <b>耳</b> を傾けてくれる人は、 あまり <b>い</b> ませんでした。	<b>起業</b> <b>ex. 棒(○)</b>  <b>耳</b> ×	我在 <b>開創保全事業</b> 的時候，我 是非常辛苦的一 <b>步一腳印</b> 地 走過來。
<b>11-2</b>	「よし、そうか、 <b>買</b> ってやろう。 セキュリティのそういったもの がね、頼めるんならば、 <b>お</b> 金を出 せば、安全が <b>買</b> えるんなら、 <b>買</b> おう。」こう言ってくれる人がい なかったんです。 <b>よく話は聞いてく れました</b> 。	よし <b>買</b> ってやろう ～ <b>お</b> う  × ↓ TV 目(絵) 9)	當時大家雖然願意聽我講，可 是卻沒有人掏錢來 <b>付</b> 費，獲得 安全。 <b>而我們讓這麼多人了解到保 全事業，其實這個過程當中， 是有人願意聽我講話。</b>
<b>11-3</b>	「もしかして、おまえ <b>テ</b> レビの見 すぎじゃないか。そういう物語を 見すぎたんじゃないか。」いうよう なからかわれかたもした。	(10%)	但是一開始的時候，甚至有人 會笑我：「嘿，你是不是 <b>電</b> 視 看多了？」

筆者テキスト 10 について見ると、ノートにおいて原情報の約 15%が相当均質に情報抽出されており、構成上も十分に情報が反映されているので、有効に訳出されていると言える。中間表示と起点言語の情報量との比較では、中間表示の情報量は平均して起点言語の 10.87%の割合で示されている。その詳細は、各ノート欄下部の ( ) 内に記入した数字のように 6%から 15%の落差が見られる。手話のサインの 40%と比べて情報内容がはるかに圧縮されているが、ここに出ている各段落を見る限りでは、適切な割合が平均値の 11%よりやや高く、約 15%の抽出率となっている。

一方、永田ノートの場合には約 31.3%の高めの抽出率を示している。しかし、筆者の高い抽出率の数字には、情報の漏れも多少あったと見ることができるので、テキストの難易度も抽出率に影響を及ぼすものの、情報伝達の内容と効率が良好な状態になるためには 2 割台の抽出率が妥当ではないかと思われる。

例えば、テキスト 11 では原情報が前段落の約 3 倍の分量であるにもかかわらず、わずか 1 割の中間表示で示されている。上記の 2 割台よりはるかに下回る抽出率で筆記をとると、11-2 の中段にあたる部分の訳語が原語に対応し損なっているように見える (SL と TL の **イタリック体**を参照)。それは、11-1 の訳語では、起点言語の比喩表現 (「足を棒のようにして」) を採用せず、むしろ目標言語に馴染んだ表現を用いているために、通訳者の注意力が分散され、次の情報処理に仕向ける精力が低下し、過小の情報保存では情報伝達に支障を来すからであろう。これについて通訳理論の観点から解釈すると、Gile (1995) の “Effort Model” で示されるごとく、通訳者の注意力が一定の上限を超過した場合には、必ずや情報の理解・分析・保存・調整・訳出というプロセスにおいて、何らかの情報漏れや誤りや伝達遅延などの現象が現れてくるためであると言えよう。

次に、中間表示の記述の内容と構成について、その原則と特徴に焦点を絞ってさらに検討していく。記述する内容と方法に関しては、前節で触れたように、記号で示される情報は抽象的な関係や論理が中心となるが、具体的な事物や談話の主題に関わる情報は略語によって表されている。この点について、永田と筆者のテキストから (N と Y で記す)、さらに例を取り上げて実証を加える。例えば、談話の主題として提起された場合の「中日関係」は “C-J” (N-1,12,14,22,23)、「セコム」は “SCM” (Y-4)、「セキュリティー」が “scrty” (Y-9, 10) と記載されている。また、対象とされる談話情報では、「幹部の皆さんに謝意を述べたい」(Y-3) ことが、「かんぶ」も「みな」も仮名で示されている。そして、事象に関連する情報では記号・略字・図形・文字などが混在した形で記載されている。例えば、「(友好) ブーム」(N-1; 図形)、「時代 (推移)」(N-2, 3, 4; 英字)、「何が (主流)」と「(主流) 形成？」(N-6, 7; 記号)、「ネクタイの用途」(Y-8-2; 文字)、「セキュリティーの成立」(Y-10; 文字) や「セキュリティーを買う」(Y-11-2; 文字) などが挙げられる。

一方、具体的な事象や談話の参加者にとって既知の事実や話題に反して、話者が自ら持ち出した抽象的な比喩や論理関係を語る場合、線や記号、または記号の位置などで表されることが多い。例えば、線の扱い方で特定の意味を定義して使うことができる。筆者テキスト 9, 10 のように “/” は A と B の対照関係を示す。そこで、「日本や台湾」を対照的に示す場合は、“JP/TW” のように斜線で両者の対照関係を表すようにする。さらに、語感の表現や重点の所在などのモダリティー表現については、「私は毎日 足を棒のようにして、売りに歩きました。」(Y-11-1) を “ex. 棒 (○)” で表している。また、「セキュリティーの仕事が成立させ、そして 成長させて来るとするのは…」(Y-10) を、“↗↘” で示している。つまり、図形や矢印を使ったり、丸で囲むなどの方法を用いて情報焦点を強調させる。さらに、永田ノートにおいても、「C-J」を用いて「中日関係」を示したり (N-1, 12, 14, 22, 23)、「C-J」を丸で囲んだりすることで情報焦点を示す (N-8, 11, 23) 手法が採用され、抽象的な概念や論理関係についての情報処理や評価が表される。

以上の考察を踏まえつつ、情報が記載される位置について観察すれば、下記の特徴が見られる。

(1) 範疇や談話の主題を示すものは左方に置かれる。例えば、「中日関係」(N-1, 8, 12, 15, 22, 23; 談話範疇)、「2つのこと」(N-15~19; 主題)、「約30年」(Y-3: 時間範疇)、「セコム」(Y-4: 主題)、「30年前、40年前」(Y-6: 時間範疇)、「ネクタイ」(Y-8: 主題)、「日本や台湾」(Y-9, 10: 場所・範疇)などは、ほぼ行の左端か段落の上左の位置に記される。こうした位置の扱いかたによって、情報内容の性質まで示すことができるようになる。

範疇や話題のような情報内容は談話の機能と構造から見れば、いずれも先頭に立って、情報を提示する (presentational word/phrase) 役割をなしている。Schiffrin (1987) が指摘した POSITION の一部となる成分でもあるが、情報縄張り理論で説明すれば、話し手が聞き手に初めて情報を伝達するために、時間や場所や主題などによって最も共通認識が形成されやすい情報縄張りを設定したわけである。こうした情報伝達の起点とする成分や記入する位置などを規定することによって、それに関連する情報に対する認識も高まる相乗効果が期待できるであろう。

(2) 並列成分・起点と着点・動作と客体など、対照的なものは相対的に置かれる。例えば、「前董事長や現董事長」と「社員の皆さん」(Y-3) は、括弧を用いて両者の関係を示す。「悲観的ではなく、むしろ比較的に楽観している」(N-14)、および「30年前の台湾」と「40年前の日本」(Y-6) は上下に記載されているほか、その間にさらに大きな斜線(N-14)や大括弧(Y-6)をもって対照関係が表されている。また、「中日関係は国交正常化後、友好ブームを迎えた」(N-1) のように、「中日関係」と「国交正常化」との位置関係が上下となり、そして「国交」と「ブームを迎える」との間に右上の線を引くことにより関連性をつけている。さらに「ネクタイを買う」と「買う習慣」(Y-8) のような行動と客体との関係では、「買う」が三角の頂点に置かれ、「ネクタイ」と「習慣」の間に線が引かれており、「買う」という行為における継起関係を示している。

以上のように、相対的位置にある情報内容は、強調や重複された情報焦点でもある。Grimes (1975) や情報縄張り理論で指摘された、いわゆる旧情報から新情報へ移行する過程に当たるものである。さらに重複を重ねて現れた場合は、情報内容が新情報から強調表示 (highlighting) へと移行することとなる。それは、筆者の通訳ノート 2-3-4 (30年→40年→会社設立) の内容と、6-7 (30年前の台湾/40年前の日本→警備会社設立) との関係を見ても分かるように、Grimes が示した「重ね構造」がここで検証できるわけである。それと同様に、永田ノートでも 1-2-3-4 にあったように、中日関係→(中日) 国交正常化→友好ブームを迎えた→(友好ブームを) 終えた→(中日関係の) 実務時代→(中日関係の) 成熟時代に入ったという構成がなされており、いわゆる「重ね構造」がここでも表れている。

上記のように、中間表示の内容と構成は通訳ノートの「文法」を形成することとなる。文字と略語は形態素 (morpheme) とされ、線や記号や位置などは中間表示の統語法 (syntax) として考えられる。また、記載する情報の素性 (feature) について分析すると、事象性を基準に、±event と記述することができる。従って、抽象的な比喻や論理関係やモ

ダリティー表現などの非事象的な情報内容は (-event) と記され、記号や機能性を表す中間表示が多く用いられる。一方、具象的な事物や詳細な叙述 (recount) や命題を中心とする事象的な情報内容は (+event) と記されて、文字や略語など意味内容を表す中間表示が多用される。このように整理すると、言語に関わる中間表示が、言語表現の規則で類推可能な形にまとめられ、かつ運用することもできるようになるだろう。

## 5. 結び

これまでの認知言語学のアプローチにおいては、言語処理における中間表示の介在は認められるが、実証することはかなり困難であった。ところが、逐次通訳のノートや手話などのような実在の形を有する中間表示は、まさに情報伝達のメカニズムを実証するためのよい言語資料となる。そこで本稿では、口語日本語を起点言語とする情報内容を対象に、通訳ノートにおける中間表示を通して、情報の意味内容と構成方法がいかに処理されているかについて詳細に検討を行った。

このような情報表示の研究によって得られた成果は、コミュニケーション論では、情報交換、情報の濃縮、情報の形態変化、および記号化と復号化のメカニズムなどの分野に応用することができる。語学教育においては、要約の要領や情報の取捨選択、または情報の再現などの利用方法が考えられる。しかし、より広範な分野への試みを考えると、中国語や英語などを起点言語とする研究も視野に入れる必要があるであろう。今後、多言語の研究を通して、言語間における情報の変容を中心とする情報伝達の有効性を、さらに探っていくことにしたい。

---

著者紹介：楊承淑 (YANG Cheng-shu) (台湾) 輔仁大学翻訳学研究所教授。(日本) 東北大学文学研究科修士。専門は通訳理論、通訳教育、翻訳・通訳職業規範。台湾翻訳学学会創立会長 (1997～2002)、常務理事 (2002～)。

E-mail: flcg1009@mails.fju.edu.tw

---

編集注：本文および添付資料中に引用されている中国語が、一部、使用しているフォントの制限のために本来の字体で表示されていないものがあります。お詫びしてご理解をいただけるようお願い申し上げます。

### 【註】

- 1) 専門性の高い通訳は対話のような短いものが極めて少なく、おおむね 3～15 分ほどのまとまりのある講演・講義・コメントなどが多い。そのため、本稿では逐次通訳は講演を、手話通訳は講義をそれぞれ考察対象とする。
- 2) 情報縄張り理論を用いて、即席講演の同時通訳における情報構造のパターン化と語彙

内容の重ね構造についての分析は、楊 (2004) 「中日口語談話構造的對比分析」を参照。

- 3) 日本語の字数を算出する基準は漢字と仮名を混じえたものを計数の基礎としている。
- 4) 漢字は字数、仮名は仮名数、略語は漢字に準じて、意味を表す単位を基準にする。例えば “TW” は1個と見なされる。
- 5) ここの「棒」の字に丸をつけたために、( ) をもって示す。また、点や重なった記号なども計数に入れる。
- 6) 楊 (2004: 127-129) 「日中サイト・トランスレーションにおけるセグメンテーションについて」
- 7) [約30年] に丸をつけたために、ここではそれを (○) をもって示す。また、点や下線や括弧や区切り線、および重複に使った記号なども計数に入れる。
- 8) ここの「買う」はテキスト7の「買う」を重複に使ったため、( ) で表すことにし、計数の際、1個として数える。
- 9) ノートでは目の形で絵にしているが、ここは図形で示すことができなかつたために、「(絵)」と示す。

#### 【参考文献】

- Gile, D. (1995). *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Grimes, Joseph E. (1975). *The Thread of Discourse*. The Hague: Mouton.
- Jones, R. (1998). *Conference Interpreting Explained*, Manchester: St. Jerome Publishing.
- Kamio, A. (1997) *Territory of Information*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Miller, G. A. (1956). The magical number seven, plus or minus two: Some limits on our capacity for processing information. *Psychological Review*, 63, 81-97.
- Schiffrin, D. (1987). *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- van Dijk, Teun A. "Action, Action Description and Narrative". *New Literary History*, pp. 273-294. Charlottesville, Va.: University of Virginia, No.6, 1974.
- Weaver, W. W. and N. Garrison. (1977). The coding of phrases: An experimental study. In A. J. Kingston (ed.), *Toward a Psychology of Reading and Language*, pp.113-118. Athens: University of Georgia Press.
- 門田修平・野呂忠司 (2001) 『英語リーディングの認知メカニズム』 東京：くろしお出版。
- 神尾昭雄 (2002) 『続・情報のなわ張り理論』 東京：大修館書店。
- 神尾昭雄・高見健一 (1998) 『談話と情報構造』 東京：研究社出版。
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論：言語の機能的分析』 東京：大修館書店。
- 泉子・K.メイナード(2001) 『談話分析の可能性』。東京：くろしお出版。
- 白澤麻弓・斉藤佐和 (2001) 「日本語 - 手話同時通訳に関する文献的考察——音声同時通訳研究



- との比較から」『心身障害学研究』, 25, 197-209. つくば市：筑波大学心身障害学系。
- 田窪行則・金水敏 (2000) 「複数の心的領域による談話管理」『認知言語学の発展』坂原茂 編, pp. 251~280. 東京：ひつじ書房。
- 永田小絵(2000) 「逐次通訳ノートから見た談話理解の方策」『通訳研究』日本通訳学会設立記念特別号 pp. 41-51.
- 若松利昭 (1989a) 「手話の情報伝達機構について (2)」  
『日本福祉大学研究紀要第2分冊』, 78, 7-84. 名古屋：日本福祉大学。
- \_\_\_\_\_ (1989b) 「手話の情報伝達機構について (3)」  
『日本福祉大学研究紀要第2分冊』, 79, 82-49. 名古屋：日本福祉大学。
- \_\_\_\_\_ (1990a) 「手話の情報伝達機構について (4)」  
『日本福祉大学研究紀要第1分冊』, 81, 191-203. 名古屋：日本福祉大学。
- \_\_\_\_\_ (1990b) 「手話の情報伝達機構について (5)」  
『日本福祉大学研究紀要第1分冊』, 84, 110-89. 名古屋：日本福祉大学。
- \_\_\_\_\_ (1991) 「手話の情報伝達機構について (6)」  
『日本福祉大学研究紀要第1分冊』, 85, 100-88. 名古屋：日本福祉大学。
- 楊承淑 (2004) 「日中サイト・トランスレーションにおけるセグメンテーションについて」,  
『通訳理論研究』論集, 123-136, 東京：日本通訳学会。
- 楊承淑 (2004) 「中日口語談話構造対比分析」『輔仁外語学報』, 創刊号, 1-35頁, 新莊：輔仁大学外国語学部。

付録1：手話通訳実例 (若松 1989,45-46 より抜粋)

キーワード=太文字 網掛け=話題転換 訳における情報ゆれ=イタリック体  =情報漏れ

CT: 中国語訳	SL: 起点言語	BT: 逆通訳	TL: 手話訳
1 阿一	1 えーと		
2 今天	2 今日は		
3 是這樣的	3 ですね		
4 嗯一	4 えー		
5 上次的	5 前回の	1 前回の	1 前
6 上次嘛て	6 前回って	2 話	2 言う
6 說是	6 言って	3 ですけども	3 けれども
7 這麼說	7 も		4 続く
8 嗯--	8 えー	4 ゴールデンウィークが	5 休み
9 黃金週	9 ゴールデンウィークが	5 入ったので	6 入る
10 過完	10 入ったんで	5 ので	7 ので
11 之後 所以	10 した…ので	6 前に	8 前
12 上次	11 前回	7 何を	9 何
12 什麼	12 何	8 言った	10 する
13 講過	13 やった	8 か	11 か
13 啥沒講	13 か	9 忘れて	12 忘れる
14 忘	14 忘れ	10 しまった	<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 1em; height: 1em; vertical-align: middle;"></span>
14 掉了	14 ちゃった	11 人も	13 人々
15 的人也	15 人も	12 いると	14 いる
16 有	16 いると	13 思います	15 思う
17 (我) 想	17 思います	14 が	16 けれども
18 而	18 けれども	15 前回の	17 前
19 前次的	19 前回の	16 話を	18 手話
20 上課的	20 話の	<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 1em; height: 1em; vertical-align: middle;"></span>	19 続く
21 接續	21 続きを	<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 1em; height: 1em; vertical-align: middle;"></span>	20 やる
22 嗯--	22 えー	17 したい	21 したい
23 想要進行	23 していきたい	18 と	
24 這樣子	24 いうふうに	19 思い	22 思う
25 想	25 思い	20 ます *	23 ます
25 嗯	25 ます	<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 1em; height: 1em; vertical-align: middle;"></span>	
26 所以呢	26 え		24 それから
27 嗯--	27 それで	21 今日は *	25 今日
28 今天	28 えーと		
29 是這樣的	29 今日は		
30 嗯--	30 ですね	22 少し	26 少し
31 一些	31 えー	23 ある	<span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 1em; height: 1em; vertical-align: middle;"></span>
32 一個	32 ちょっと	24 目的が	27 問題
33 目的	33 ある	25 あって	28 ある
34 是有的	33 目的が		
35 嗯--	34 ありまして	26 お二人の	29 二人
36 兩位	35 えー	27 方に	30 方に
	36 お二人の		
	37 方に		
	38 えー		

37 老師	39 講義を	28 講義を	
38 嗯--	40 手話で	29 手話で	31 講義
39 把上課內容	41 あの		32 手話
40 用手語	42 して	30 やって	
41 嗯--	43 もらって	31 もらって	
42 比	44 います	32 います	
43 出	45 えーと		33 やる
44 來	46 こちらの	33 こちらの	34 いただく
45 嗯--	47 方が	34 方が	35 ます
46 這邊的	48 神谷さん	35 神谷さん	
47 這一位	49 神谷さん		36 こちら
48 神谷女士	50 です		37 方
49 神谷女士	51 それから		38 が
50 是	52 そちらの		39 神
51 然後	53 方が		40 谷
52 那邊的	54 えー		41 女
53 那位	55 清水さん		
54 嗯--	56 です		
55 清水先生	57 で		
56 是		36 で	
57 而			42 で

付録 2-1：永田(2000:44) 逐次通訳テキスト：「唐外相記者会見」（抜粋）

起点言語（SL）テキスト：

1. 中日關係在邦交正常化以後，迎來了一個熱潮。
2. 但是過了一段，乾杯、友好的時代很快就過去了。
3. 那麼進入了一個實務的時代、務實的時代。
4. 現在我認為已經進入了一個全面的成熟的時代。
5. 我想我們看問題要看主流。
6. 究竟什麼是主流？
7. 形成主流？
8. 我認為在中國、在日本包括剛才您講的庶民階層在內，也可能在有些問題上存在不同的看法，甚至存在很不同的看法。
9. 有比較特殊的分歧。
10. 興奮之餘也可能會講一些過於興奮的話。
11. 但是我認為這不是主流。
12. 我的看法是中日關係總體上來看、客觀地分析，還是良好的。
13. 至少是比較良好的。
14. 我對於中日關係，不悲觀，而且我是比較樂觀的。
15. 那麼，為了使中日關係能夠更好地健康成長、能夠正常的發展，而且在各方面取得更佳豐碩的成果，我認為現在需要抓兩件事情。
16. 一個是呢，需要發展高層的交往，

17. 包括領導人之間的交往。
18. 第二個要發展民間的各個方面的友好交往。
19. 特別是中年、青年之間的交往。
20. 我感到我這次在東京和日本方面包括日本領導人在會晤的時候，這兩點我們取得了重要的共
21. 我所想的也是日本領導人所想的，不謀而合。
22. 我相信，在我們雙方共同的努力之下，在中日之間的三個重要的文件的原則的基礎上，本着過去我們多年來，也是我的部首任部長周恩來總理所倡導的求同存異的精神平等相待、尊敬相互信任、促進合作，這樣的精神做的話，中日關係是一定會實現長期穩定的正常發展。
23. 今後的中日關係，我認為應該是為了亞洲的和平與發展、為了世界和平與發展的關係。

**附録 2-2 : 永田(2000:45) 逐次通訳テキスト : 「唐外相記者会見」 (和訳)**

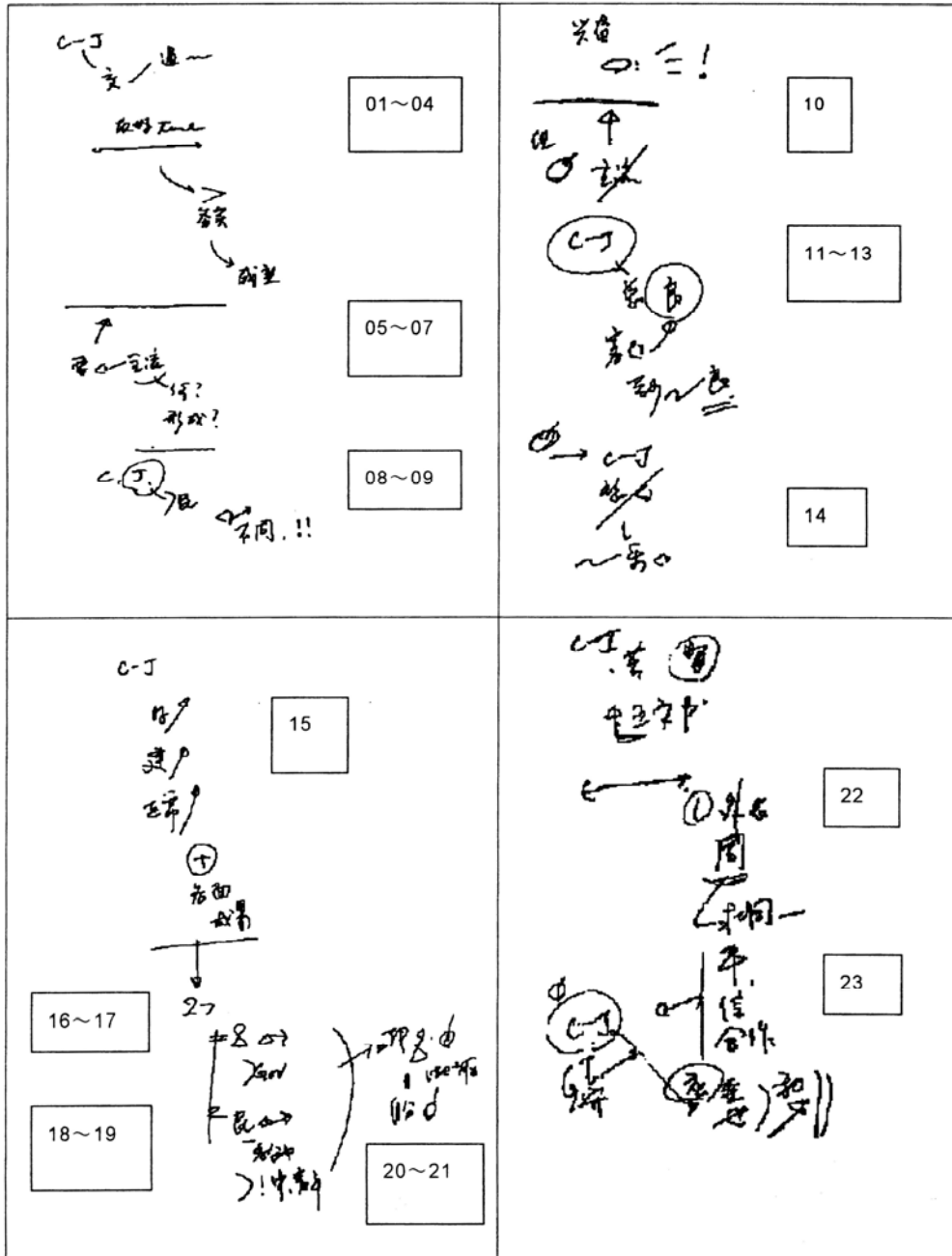
**目標言語 (TL) テキスト :**

- 1 中日關係は国交正常化後、友好ブームを迎えた。
- 2 しかし、一時期の、乾杯、友好万歳という時代はすぐに終わった。
- 3 そして、実務の、実務的な時代に入っていった。
- 4 現在、私はすでに全面的に成熟した關係の時代に入ったと思う。
- 5 私は、我々はこの問題を考えるのに主流になっているものを見るべきだと思う。
- 6 いったい、何が主流なのか。
- 7 主流を形成しているのか。
- 8 私は、中国で、日本で、さきほどあなたの言った庶民階級を含めて、おそらくいくつかの事柄に関しては、異なる見方、時には非常に異なる見方があるかもしれない、と思っている。
- 9 比較的、特殊な意見の食い違いがある。
- 10 興奮のあまり、感情的な発言をすることもあるだろう。
- 11 しかし、私はこれが主流であるとは思わない。
- 12 私の見方は、中日關係は全体的に見れば、客觀的に分析すれば、やはり良好だ。
- 13 少なくとも、比較的に良好だ。
- 14 私は中日關係に関して悲觀的ではなく、むしろ比較的樂觀している。
- 15 それでは、中日關係が更に健全に發展することを可能にするためには、正常に發展することを可能にするためには、そして各分野でよりよい豊かな成果を上げるためには、私はいま 2 つのことをしっかりやらなければならないと考えている。
- 16 ひとつは高いレベルでの交流を盛んにすることだ。
- 17 指導者同士の交流を含めてである。
- 18 2 つめは、民間の様々な分野の友好交流を發展させることだ。
- 19 とりわけ、中年や青年の相互交流である。
- 20 私は今回、東京で日本側の、日本の指導者を含めて、会見したときに、この 2 点について、我々は重要なコンセンサスを得た。
- 21 私の考えていることは日本の指導者の考えていることと凶らずも同じであった。
- 22 私は、我々双方がともに努力し、中日間の 3 つの重要な文書原則に基づき、我々がこれまで長年にわたって、つまり我が (外交) 部の初代の大臣である周恩来総理が提唱した「小異を残して大同を求める」精神にのっとり、平等に相對し、尊重し、互いを信用し、協力を促進する

- という精神でやっていけば、中日関係は必ず長期安定に正常に発展していくと信じている。
- 23 今後の中日関係は、私はアジアの和平と発展のための、世界の和平と発展のための関係であるべきだと考えている。

付録 2-3 : 永田(2000:47) 逐次通訳ノート : 「唐外相記者会見」

図 4 唐外相記者会見テキストの NT 例



付録3：筆者逐次通訳ノート：「セコム飯田亮会長スピーチ」

